

『アダム・スミス問題』をめぐつて(一)

岩 松 繁 俊

一、問題の限定

アダム・スミスのふたつの著作、すなわち道徳的感情の理論 *The Theory of Moral Sentiments; or An Essay towards an Analysis of the Principles by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character, first of their Neighbours, and afterwards of themselves*, 1st ed. 1759, 6th ed. 1790. と諸国民の富 *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 1776. とのあいだに、立場の矛盾があるのではないか、という疑問が抱かれ、約一世紀にわたつて数多くの解釈や論争が行われたことは周知のことである¹⁾。而してこのいわゆる *das „Adam Smith-Problem“* には、今日においてすでに定説的解答が成立したとかがえられる²⁾。アダム・スミスの利己心の思想はかれの倫理思想と毫も矛盾しないとして、あとに残されたひとつの問題は、この一見矛盾することくに見える利己心と同感とを統一的に解釈することである³⁾、といわれる。本稿は、しかしながら、このような意味の「残された問題」を取扱おうとするのではない。「残された問題」が解決されたとしても、なおそのあとに、まだ残された問題がないであろうか。これは、じつは、スミスの利己心を歴史的に解釈するという範囲をこえて、スミスの利己心そのものの当否を批判的に究明するという大それた企図をいみしている。一般にスミスの学説史的研究は、スミスにあらわれている思想をスミスの内面に即して解釈すれば、おわる⁴⁾。しかし筆者は、さらに一步をすすめて、スミスを批判的にみようとする。スミスの利己心をいちど問題としてとりあげようとする。ところでこの問題にたいして答えるためには、

古代ギリシャの哲学、原始キリスト教、中世キリスト教、ルネサンス期の人間観について、ひろくふかい知識をもっていることを要請される。人類文化の変遷と発展⁹⁾を真理それ自体のために¹⁰⁾研究せんとした偉大なるアダム・スミスを、いやすくも何らかのいみで論評しようとするものにとつて、この要請はけだし当然すぎるであらう。しかしこの問題の困難さと要請のきびしさの前に立つて、筆者はたゞちからのなさを知るのみである。本稿の明らかにしうところは真理の世界全体よりみれば無にひとしいといわねばならないが、従来ふかくかえりみられず、しかも筆者にとつては多年疑問となつていたところを問題として提出することによつて、消極的にはあるが何らかの貢献とならないであらうかというのが、本稿のもつさうやかないみである。

註1) 『アダム・スミス問題』に関するおびただしい文献のうち、筆者が利用することのできた文献はわずかに次のとき数冊にすぎない。

- ① August Oncken, Adam Smith und Immanuel Kant, 1877.
- ② Henry Thomas Buckle, History of Civilization in England, 1857.
- ③ James Bonar, Philosophy and Political Economy—in Some of their Historical Relations, 1893. 東晋太郎訳「経済哲学史」
- ④ L. Stephen, History of English Thought in the Eighteenth Century, 1876.
- ⑤ W. R. Sorley, A History of English Philosophy, 1920.
- ⑥ 小泉信三「国富論」と「道徳情操論」(福田徳三博士追憶論文集 経済学研究) 昭和8年
- ⑦ 杉村広蔵、倫理思想家としてのアダム・スミス(アダムスミス生誕二百年記念論集 商学研究3巻1号) 大正12年
- ⑧ 高島善哉、経済社会学の根本問題、昭和16年
- ⑨ 大河内一男、スミスとリスト、昭和18年
- ⑩ 大道安次郎、スミス経済学の生成と発展、昭和15年
- ⑪ 高島善哉監修、アダム・スミス、昭和25年
- ⑫ 田中吉六、スミスとマルクス、昭和23年

⑬ 大河内一男、独逸社会政策思想史、昭和11年
なお本稿作成にあたり参照することのできたアダム・スミス文獻（批判に終始する文獻はこれをのぞく）は、右のほかわずかに次の数冊にすぎない。

- ① John Rae, *Life of Adam Smith*, 1895.
- ② W. R. Scott, *Adam Smith as Student and Professor, with Unpublished Documents, including Parts of the "Edinburgh Lectures", a Draft of The Wealth of Nations, Extracts from the Manuscripts of the University of Glasgow and Correspondence*, 1937.
- ③ Francis W. Hirst, *Adam Smith*, 1904.
- ④ C. R. Fay, *Adam Smith and the Scotland of His Day*, 1956.
- ⑤ 高島善哉水田洋訳、アダム・スミス グラスゴウ大学講義、昭和22年
- ⑥ 大道安次郎訳、アダム・スミス 国富論の草稿その他、昭和23年
- ⑦ 高島善哉編、スミス国富論講義、昭和25—26年
- ⑧ 高島善哉、原典スミス『国富論』解説、昭和28年
- ⑨ 水田洋、アダム・スミス研究入門、昭和29年
- ⑩ 中山伊知郎、スミス国富論、昭和11年
- ⑪ 小泉信三、アダム・スミス、マルサス、リカアドオ、昭和9年
- ⑫ 水田洋、近代人の形成、昭和29年
- ⑬ 内田義彦、経済学の生誕、昭和28年
- ⑭ 高島善哉編、古典学派の成立（経済学説全集）、昭和29年
- ⑮ 出口勇蔵編、新訂経済学史、昭和30年
- ⑯ 河合柴治郎、社会思想史研究、大正12年
- ⑰ 相沢秀一、黎明期の市民経済学、昭和22年
- ⑱ 馬場啓之助、経済学の哲学的背景、昭和26年

「アダム・スミス問題」をめくって

⑩ 杉村広蔵、経済哲学の基本問題、昭和10年

⑪ 越村信三郎、アダム・スミス、昭和23年

⑫ 橋崎敏雄、経済学の開拓者スミス・マルサス・リカード、昭和24年

なお、藤原知義、新しい『アダム・スミス問題』の提起(経済評論、5巻11号)はこゝで述べるアダム・スミス問題とは全く別種の、学説史的論理の意味での、いわば新しい「アダム・スミス問題」である。

2) 小泉信三、「国富論」と「道徳情操論」1頁、大道安次郎、スミス経済学の生成と発展、おー2、285頁、同、国富論の草稿

その他、お頁、水田洋、アダム・スミス研究入門、73、182頁、高島・水田訳、グラスゴウ大学講義、解説、高島善哉、経済社会学の根本問題、168頁、同、アダム・スミスの市民社会体系、61頁、大河内一男、スミスとリスト、51—58頁、H. T. Buckle はその History of Civilization in England, Vol. III, p. 364 において——スコットランドのすべての思想家のうちで群

を抜いてもっとも偉大であったこの思想家の哲学を理解するためには、両方の書物をひとつとして同時にとりあげねばならない。なんとすれば、それらは実際にはひとつのもののふたつの面であるからである——といっている。

3) 水田洋、アダム・スミス研究入門、73頁

4) アダム・スミスの思想体系については、死の直前焼却された未定稿をのぞいて、何らかのかたちで残存する著作にもとずいてかなり明瞭に再現することができる。いまスミスの著作体系を歴史的に網羅する能力をもたないけれども、J. Rae, Life of Adam Smith; W. R. Scott, Adam Smith as Student and Professor; F. W. Hirst, Adam Smith, 水田洋、アダム・スミス研究入門、小泉信三、アダム・スミス・マルサス、リカード、大道安次郎訳、国富論の草稿その他、同著、スミス経済学の生成と発展、村松恒一郎、アダム・スミス年譜(生誕二百年記念論集35—38頁)、高島善哉監修、アダム・スミス、などによってスミスの著作、講義、おもなできごとを、アダム・スミス問題のよりよき理解のために必要とおもわれるかぎりにおいて、年代順ならべてみると、次のようになる。

1737—40 Enquiry into the Laws which govern the Conduct of Individuals in Society をグラスゴウ大学在学中 Francis

Hutcheson の指導のもとかく(Scott, ibid., p. 35)。

1746—48 The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries; as illustrated by the History of Astronomy——オックスフォード大学在学時代に資料をあつめ、同大学をやめて故郷カーユウディの母の家に帰り「研究に身を委ねたが

また将来の生活について何の定まった計画ももたなかった」時代（1746年8月—1748年秋）にかいたと推定される（Hirst, *ibid.*, pp. 16—18）。この論文は四つの Section から成り、はじめの三つの Section は序論であつて、それぞれ Surprise と Wonder と哲学の起源とを論じている。その36頁には——したがつて、その発見から利益をえようという期待ではなくて、好奇心（疑い）Wonder が、哲学、あるいは、いろいろな自然の現象を統一するかくされた関係をあきらかにすると公言する科学、の研究に人類をかりたてて第一の原理である。そしてこれらはこの研究を、多くの快樂の手段を提供するものとかがえないで、それ自身根源的なようこび、もしくは善として、それ自身のために追求するのである——とかいてある。これらの序論を、「驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように、知恵を愛求しはじめたのである。……ところで、このように疑念をいだき驚異を感じる者は自分を無知な者だと考へる。……したがつて、まさにただその無知から脱却せんがために知恵を愛求したのであるから、かれらがこうした認識を追求したのは、明らかに、ただひたすら知らんがためにであつて、なんらの効用のためにでもなかった。そしてこのことは、その当時の事情がこれを証明している。すなわち、安泰な暮しや楽しい暇つぶしにも必要なあらゆるものがほとんど全く具備された時に初めてあのような思慮が求められだしたのであるから。」というアリストテレスの論（「形而上学」, 982b¹ 出隆訳、上巻、12—13頁）と比較することができ。おわりの Section が本論であつて、Thales や Pythagoras かゝ Copernicus, Tycho, Brahe, Galileo, Kepler, Descartes を経て Sir Isaac Newton の学説にいたる天文学の歴史をのべている。しかしニュートンに關してのべられた結論だけは、晩年にかきくわえられたものであるといつていゝである。Hirst も17頁にそうかいてある。スミスは1773年一応完成した「諸国民の富」の原稿をもつてロンドンへむかうにあたり、4月16日ヒュームにあつて、未刊の草稿の処分について依頼する手紙をかいた。それが Rae, *Life of Adam Smith*, pp. 262—63 にのせてあるが、そのなかでスミスは——わたしがいま、じぶんでもつてゆくものをのぞけば、公刊にあたいするものはひとつしかないことをおしらせしなければなりません。それはデカルトの時代までにつぎつぎと支配的になつた天文学上の諸学説の歴史をふくむ、大著の断片なのです。それがわかいころくわだてられた著作の断片として公刊されるべきかどうかということについては、まったくあなたの判断にまかせます。……といつてある。これによつて、かれがわかいころから大きな学問の体系を構想していたことを、かれじんの記録としてしることができ。

1748 William Hamilton of Bangour の詩集をしゅう集し、グラスゴウの Louis 書店から出版。このことはかれが文学に

もそうけいひのふかかったこと（詩人たるべき夢を抱いたこともあったと Rae はいう）を示している（Rae, *ibid.*, pp. 34—35, 38—41; Scott, *ibid.*, pp. 61—62）。

1748—49 } Parts of the “Edinburgh Lectures” —— エディンバラ講義の内容の詳細について Scott の考証（*op. cit.*）
 1749—50 }
 1750—51 } あら。第一期は文学、第二期は文学または哲学、第三期は経済学を含んだ法学の講義であつた（Scott, *ibid.*, p. 51）。文学に関する講義は、Scott によれば、まず言語論、次に芸術論で、その内容は、前者については *The Theory of Moral Sentiments* の第三版 1767 以後附録として収められてゐる Considerations concerning the First Formation of Languages, and the Different Genius of Original and Compounded Languages がそれに相当し、後者は同じく遺稿集 *Essays on Philosophical Subjects*, by late Adam Smith, edited by Balack and Hutton, with an Account of the Life and Writing of the Author by Dugald Stewart, 1795 以後のふたつに Of the Nature of that Imitation which takes place in what are called the Imitative Arts がそれに相当する（Scott, *ibid.*, p. 52）。Hirst によれば、後者の論文自体がこの時期に起草され、後年修正されたものと見てゐるが（Hirst, *ibid.*, p. 20）Scott によればこの時期の作ではないと見てゐる（Scott, *ibid.*, pp. 59—61）。哲学に関する講義は *The History of the Ancient Logic and Metaphysics* にいつてゐたことをめられる（Scott, *ibid.*, p. 53）。最後の法学に関する講義は、Scott の考証（*op. cit.*）の documents によれば、四部にわかれ、最初の部分はグラスコウ講義の Domestic Law と Private Law に対応する序説、道德的義務、Moral Sentiments の五版まで収められていた償ひ Alonement の論、物質的賞罰の論、更に自然法学あるいは法的一般原理の理論、正義と博愛の関係、博愛と怒りと処罰の関係の論から成つてゐる（Scott, *ibid.*, pp. 58—9）。第二部は「富裕の進歩」“the progress of opulence” にいつて論ぜられ、その題は “Prices of corn, cattle etc. in Scotland from the earliest times to the death of James V” であつたとする。しかしこれについては疑問の余地がある（Scott, *ibid.*, p. 59）。第三、第四部は純粹に經濟學的な講義、すなわち、I. Division of Labour (*The Philosopher and the Porter. Extent of the Market*) II. Land and Water Carriage（現在わかつてゐる部分のみ）より成り、かれの最初の經濟學的勞作として注目すべきものである。Scott はこの部分をその著書の 379—85 頁に写真版で複製してゐる（邦訳は大道安次

郎訳、国富論の草稿その他、201—212頁に収められている。またこの時期のおわりに、Humeをした。

1751 De origine idearum——この年の1月9日グラスゴウ大学論理学教授にえらばれ、その一週間後に発表したラテン語就職論文 (Rae, *ibid.*, p. 42)。この論文の実質は遺稿集 *Essays on Philosophical Subjects* に収められている The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries : illustrated by the History of the Ancient Logics and Metaphysics のなかに保存されていると Hirst はいう (Hirst, *ibid.*, p. 23)。これはかれの広大な学問への関心と古典的学識のゆたかさと正確さをしめすものとして注目されるべきである。

1752 4月かれは道徳哲学の講座に転じた。かれがグラスゴウ大学でどのような講義をしたか、については、ふたつの資料がある。ひとつはながいあいだ承認されてきた D. Stewart の説であり、もうひとつは Edwin Cannan の発見によるグラスゴウ講義の筆記である。なか、Scot, *ibid.*, Appendix VII. pp. 424—31. によれば、モスクワ大学からの派遣学生 Denisitsky が、1761—67年グラスゴウ大学で学び、68年モスクワ大学教授となつて講義した草稿が、スミスの思想をつたえていることである。そして Stewart によれば、1751—2年かれの講義をきき、のちにグラスゴウ大学法学部の教授となつた John Millar の説明がいかに（ふたつの著書にかれじしんのべていることをのぞいて）、かれの講義について知るべき資料はなにものこれていないというのである (Stewart の説く Millar の説明は、1793年1月21日および3月18日 The Royal Society of Edinburgh で、Stewart があつた講義の草稿を、1794年協会会報として印刷し、翌1795年再刻した "Account of the Life and Writings of Adam Smith, LL. D." [Essays on Philosophical Subjects の巻頭にのせてあるの] ね xvii—xxii 頁がそれである) が、Cannan は、1895年4月21日 Charles Macnochie が「アダム・スミスの講義の写本を所持してゐることを知り、1896年 Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, reported by a student in 1763 and edited with an introduction, and notes by Edwin Cannan」として出版した。邦訳には、高島、水田訳前掲書と櫻原信一「アダム・スミス政治経済国防講義案、昭和18年の両書があるが、こゝでは前書を用いた。Cannan が筆記を入手した由来についてはその編者序言に述べてある。しかし Cannan の発見した筆記はスミスの講義の一部分であつて、Stewart のつたえる Millar の説明は依然として注目されなければならない。Millar の説明は、次のとおりである——スミス氏が論理学教授に任命されたとき、かれは先任者たち

のプランからずっと離れて、学生の注意を、スコラ学派の論理学や形而上学よりも興味がありかつ有用な諸研究に、むけることが必要だとさとした。そこで、かれは、精神の諸能力にかんする一般の見解をのべ、それから古代論理学のうち、かつてひろく学者の注意をうばっていた技巧的な推理方法を、好奇心を満足させるに必要なだけ説明したあとで、この時間の全部を修辭学体系と美文学の講述にあてた。……論理学教授に任命されてから約一年後に、スミス氏は道徳哲学の講座にえらばれた。この問題にかんするかれの講義過程は四つの部分にわかれていた。第一の内容は自然神学で、そこでかれは、神の存在と諸属性の証明、および宗教のきそづけとかがえられる人間精神の諸原理について考察した。第二は緻密な意味の倫理学をふくみ、主として、のちにかれが「道徳的感情の理論」で公けにした諸学説からなっていた。第三の部分においては徳性のうちの正義 *Justice* にかんする部分をさらにくわしくとりあつたが、それは緻密正確な規則の支配をうけるものであるから、十分かつ詳細な説明をなすことができるのである。この問題にかんして、かれは、モンテスキュウから暗示をうけたらしいプランにしたがつて、公私両法学の徐々の進歩を、もつとも粗野な時代からもつとも洗練された時代にいたるまであとづけようとし、また、生計と財産蓄積に役立つ諸技術が、法と統治のうえに、それに応じた改善と変化をもたらすという諸効果を指摘しようとした。かれの学問のこの重要な部門を、かれはやはり公刊するつもりであったが、しかしこの意図を「道徳的感情の理論」の結論でのべながら、かれはそれを実現するにいたらないで逝いた。かれはその講義の最後の部分で、正義の原理ではなく、便宜 *expediency* の原理にもとずき、そして国家の富と力と繁栄とを目的とする政治的諸規則を吟味した。この観点からかれは、商業、財政、および教会や軍事上の諸施設にかんする政治的諸制度を考察した。これらの問題についてかれが講述したところは、のちにかれが「諸国民の富の性質と原因にかんする一研究」という表題のもとに公刊した著作の实质をなしていた。……これでわかるように、スミスの道徳哲学の講義は、自然神学、倫理学、法学、経済学の四部門からなっていた。そして倫理学については「道徳的感情の理論」が、法学については Canan が 1885 年に発見した 1762—3 年の講義筆記 *Juris Prudence or Notes from the Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms delivered in the University of Glasgow by Adam Smith Professor of Moral Philosophy* の第一章 *Of Justice* が、その經濟學といふのは前述「講義」の第二章 *Of Police*、第三章 *Of Revenue*、第四章 *Of Arms*、1935 年 5 月 *Scott's Date of Buccleuch's Dalkeith House* で発見した、1763 年の夏あるいは秋に作成したと推

定される「諸国民の富の草稿」(Scott, *ibid.*, pp. 317—356. 大道安次郎訳、国富論の草稿その他、77—170頁、水田洋訳、国富論草稿)と「諸国民の富」が、それぞれその内容をあきらかにしている。四部門にわけるべきか三部門にわけるべきかということが、講義筆記の表題から問題になりうるけれども、平面的に並列させるのではなく、立体的に体系づけてかんがえるとき、おのずから解決せられるであらう。しかし水田洋、入門、110—111頁にはなお検討の余地があるとのべてある。

1752 1月23日、グラスゴウの Literary Society での “an Account of some of Mr. David Hume's Essays on Commerce” と題する講演をおこなった (Scott, *ibid.*, p. 82. しかく Rae, *ibid.*, p. 95. には、1753年1月23日と記してある)。

1755 グラスゴウの商業クラブで、いわゆる “Lecture of 1755” をおこなった。かれの経済的自由主義思想を知ろうに重要な一里塚といわれる。この講演については、わずかに Stewart, “Account of the Life and Writings of Adam Smith” のなかのべてある。Cf. Rae, *ibid.*, p. 62. このクラブについては、Rae, *ibid.*, pp. 90—94; Scott, *ibid.*, pp. 81—82. にもべてある。

同じ年の7月、A Dictionary of the English Language, by Samuel Johnson という題の書評を Edinburgh Review 創刊号に寄稿した。(大道安次郎、国富論の草稿その他、263—287頁にその訳が、そして213—260頁にはその解説が収められている。)

1756 この年の1月、A Letter to the Authors on the General State of Literature in Europe を Edinburgh Review, No. 2. に寄稿した。こゝでかれは、編集者に、新しい学問の紹介をおこなうについては、視野をスコットランドだけにきざらず、とおくヨーロッパ全体におよぼし、そして同時にとおい将来までとはいわなくても、この三四十のあいだは影響をおよぼすであらうとおもわれる労作を紹介するようつとめてほしいと要望し、かれじしん、自然科学、社会科学の両分野にわたり、ヨーロッパ全体の学界眼望をこころみている。注目すべき労作はフランスとイギリスだけからでているが、とくに最近は、フランスにおいて独創的な労作がうまれつつある、として、「百科全書」とルソーの「ひとびとのあいだの不平等の起源についての論」とを関心をもって紹介している。(大道安次郎、前掲書、291—316頁にその訳文が収められている。)

1759. The Theory of Moral Sentiments 初版を出版。この書はかれの最初の著書であったばかりでなく、また最も基本的な著書でもあった。たんに倫理学の体系ではなく、ひろく社会哲学的著書であった(高島善哉、アダム・スミスの市民社

会体系、40頁、鈴木秀勇、「道徳感情論」解説（Ⅰ）3頁（高島、スミス国富論講義1、83頁）。

1761. Moral Sentiments 第二版。“Considerations on the first formation of languages”を *Philological Miscellany* に発表（Scott, *Studies relating to Adam Smith*, p. 28. にかつてあることであるが、みる機会をえず、水田洋、入門、112頁から引用した）。

1763 この年の夏あるいは秋に、*Draft of the Wealth of Nations* をかいた（Scott, *ibid.*, pp. 124, 319. なお「草稿」発見直後の1935年5月23日の *Royal Economic Society* の年次集会では、1759年から63年の終までのあいだ、にかゝれたと推定していた。*Economic Journal*, Sept., 1935, p. 437.）。このきわめて初期の「草稿」は、スミスにとってひとつのおわりとひとつのはじめとをいみしている。すなわち一方で、スミスが生涯の仕事たるべきものに全力を集中しようとする事によってこれまでのたんなる文獻的徒弟年期にたいしてわかれをつけるとともに、他方、のちのフランスでのあたらしい体験、帰朝後カローディおよびロンドンでの研さんによって独自の領域をうちたてるきそがこゝにおかれたといういみでひとつのはじめである、と Scott は、*ibid.* (Scott, “New Light on Adam Smith”, *Economic Journal*, vol. XLVI, No. 183, Sept., 1936, p. 410. にかゝつあるとのことであるが、みる機会をえず、大道安次郎、前掲書72頁より引用した）。この草稿は、Scott, *Adam Smith as Student and Professor*, pp. 322—356. に全文がのせてあり、邦訳には、大道安次郎、「国富論の草稿その他」77—170頁、と水田洋、「国富論草稿とのふたつがあるが、後者はともにならない」。

1764 1月末ロンドンに行く。2月13日 *Bucklegh* 公におもとしてパリに入る。14日パリよりグラスゴウ大学総長にあてて辞職願いを発送（Scott, *ibid.*, pp. 220—21.）。3月1日大学評議員会はスミスの辞職を許可した。そのさい、大学は次のような見解を発表した、——スミス博士の辞任について、大学は……ふかいかんの意を表せざるをえない。博士はたぐいまれな誠実と愛すべき諸性質とによつて、同僚たちの尊敬と愛情のまゝとなつた。博士のなみなみならぬ天才とすぐれた諸能力と広汎な学識とは、大学にきわめておおきな名譽をあたえた。氏の優雅にして才氣ある「道徳的諸感情の理論」は、全ヨーロッパの趣味あり文筆にかんけいある人々をして、氏を尊敬させたし、氏の、抽象的な諸問題を説明するにあつたのでめぐまれた才能と、有益な知識をつたえるための誠意ある勤勉とは、氏を、人なみすぐれた教授たらしめたのみならず、同時に、氏の指導をうけた青年に、もっともおおきなよろこびと、もっとも重要なおしえをあたえたのである。

(Scott, *ibid.*, p. 221. 訳文は水田洋、入門、116頁による)。

3月3日より翌年8月まで Toulouse に滞在する。7月5日付の手紙で、「諸国民の富」の執筆をはじめたことをホームに通信した (John Hill Burton 編 *Life and Correspondence of David Hume*, MDCCXVI, vol. I, p. 228; Rae, *ibid.*, p. 179.)。その手紙の一節にいわく「グラスゴウでのわたしの生活は、いまごろでそれにくらぶると愉快で馬鹿さわぎの生活でした。わたしは時間をつぶすために、一冊の本をかきはじめました。わたしにはなすべきことがほとんどないということをわかってくださるでしょう。——編者 Burton は「かれのかきはじめた書物が『諸国民の富』であったことは、ほとんど疑問の余地がない。そしてこれが『諸国民の富』の著述にしたがっていることを公表したおそらく最初のものである。」といっている (同頁)。昨年の夏あるいは秋にかきはじめた「草稿」は Charles Townshend にあたえ、この Toulouse でふたたびあらたに、ひとつのおおきな書物の稿をおこしたのであらう。

1765 8月末—10月南フランスを旅行し、10月—12月 Geneva に滞在し、共和国制度の運用を観察した。そしてクリスマスまでの頃パリにかえる。Voltaire と交わる。

1766 パリにあつて Diderot, Marmontel, Turgot, Raynal, Galiani, Dalember, Grimm, Condillac, Gibbon, Helvetius, Walpole などと交わる。またヴェルサイユにある Quesnay の居室にあつまるハジオクラートと交わる。

1767 1月—5月、ロンドンに滞在、London Museum で、経済問題ことに植民地行政にかんする研究をした。5月カーロウディにかえり、以後「諸国民の富」の著作に専心する。Moral Sentiments 三版発行。副題 *An Essay towards an Analysis of the Principles by which Men naturally judge concerning the Conduct and Character, first of their Neighbours, and afterwards of themselves を付し* A Dissertation on the Origin of Languages を附録する。しかし米林富男「道德情操論」上、原著各版における改訂について、23頁によれば、各版の異同を厳密に比較した Eckstein のすぐれた訳著 (Adam Smith *Theorie der ethischen Gefühle*, 1926, I, S. 276 u. die folgenden Seiten.) には、副題がつけられたのは第四版であると記してあるとのことである。このことは原本をみる機会さえあれば、たちちに解決しうる問題にすぎない。

1773 4月、ほと完成した「諸国民の富」の草稿をたずねてロンドンにのぼる。この年より1776年までロンドンにあって「諸国民の富」の添削推こうに従事した。

【アダム・スミス問題】をめぐる

1774 Moral Sentiments 第四版発行。

1776 3月6日 The Wealth of Nations 第一版を出す。「すべての偉大な書物とおなじく、諸国民の富は、偉大な精神の

発露であるにとどまらず、ひとつの時代全体の発露であった。それをかいたひとは、学識と賢明と文才をもっていたが、このことにおとらず重要なのは、かれがこれらの才能をもって、ヨーロッパにおけるあたらしい科学のれいめい、あたらしい時代のはじまりに、位置したという点である。かれがかいたものは、ホモ・エコノミクスすなわち近代世界の経済人という、あのみなれぬおそろしい新種族をつくるために、まさにそのとき活動しつづつあった諸力の、表現なのであった。……ひじょうにいきいきとした人間らしい事業家……とかれが支配すべき社会との創造のためにヨーロッパで活動しつづつあったすべての力は、同時にまた、ミスがそのなかでかれの本をかいたところの、思想と制度の骨ぐみを創造するためにも活動していた。そしてその本は、親切には親切をむくいるべきであることを知っていたかのように、自分の方では、それらの力の活動をおしすすめるために強いいききをあたえた。歴史はこういうものである。あたらしい社会は、ふるい社会の殻からあらわれながら、偉大な思想家や芸術家とそのなかで仕事をしうるような、ひとつの骨ぐみをつくりだし、その作品は、反対に、旧社会の殻のさいごの粉砕と新社会のりんかくの完成強化とに、貢献する。マキアヴェリリの『君主について』、アダム・ミスの『諸国民の富』、カール・マルクスの『資本』が、そうであった。(M. Lerner, Introduction to the Wealth of Nations, Modern Library, 1937, P. V. 訳文は水田洋、ミスを生んだ時代と社会) 1—2頁〔高島、ミス国富論講義2、97—98頁〕によるが、書名だけは筆者流儀にかきかえた。)

11月9日、ヒュームの死について、ヒュームを完全に有徳だとほめたうえ、教会的信仰がなくてもやすらかに死ぬことができることを暗示する書簡をロンドンの印刷者 Strahan におくり、ヒュームの自伝に付したが、宗教界のみならず、世論のいかりを買い、無神論者として攻撃された。この手紙の全文は、この手紙の前後にかかれたいくつかの手紙の全文をけいさいし、そしてこの手紙が世間の非難をまねいたことをのべている Roe のすくれた伝記にさへ、最後の数行がいはいのせてなかったのであるが、筆者は1956年に公刊せられた C. R. Fay, Adam Smith and the Scotland of His Day, pp. 28—32. によってその全文をみるこができた。この手紙については本稿134—5頁を参照せられた。

1778 1月、スコットランド税関委員の辞令を受ける。2月、The Wealth of Nations 第二版発行。Robertson, Adam

Ferguson, Lord Kames, Dugald Stewart, James Anderson などと交わる。ひまなときには主としてギリシャの詩をよむ。

1781 Moral Sentiments 第五版。

1782 The Wealth of Nations 第三版の増補として東印度商会の歴史を研究する。

1783 同右の増補を別冊として出版。

1784 同右の増補を合して第三版発行。

1786 同じく、第四版。

1787 11月、グラスゴウ大学総長に選挙された。

1788 11月、大学総長に再選された。

1790 Moral Sentiments を訂正増補し第六版として出版した。3月病進み、7月11日、16巻の草稿を焼却した。7月17日逝
去。Canongate Churchyard に葬る。

1795 遺稿集 Essays on Philosophical Subjects が出版された。このなかに収められた原稿は次のごとくである。

① The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries ; illustrated by the History of Astronomy.

② The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries ; illustrated by the History of the Ancient Physics.

③ The Principles which lead and direct Philosophical Enquiries ; illustrated by the History of the Ancient Logics and Metaphysics.

④ Of the Nature of that Imitation which takes place in what are called the Imitative Arts.

⑤ Of the Affinity between Music, Dancing, and Poetry.

⑥ Of the Affinity between certain English and Italian verses.

⑦ Of the External Senses.

編者序文には次のように記してある——たいへん惜しまれたこれら論文の著者は、その公表に適しないと考えた他の多くの原稿をその死の直前に破棄せしめたが、こゝに収めた諸論文はその友人の手によだねてその適当とみとめるところにしたがって処理せしめたものである。これをしらべてみると、その大半はかかつて構想した科学および芸術 the

liberal sciences and elegant arts の関聯したひとつの歴史を書くとする計画の諸部分を成すもののように思われた。

- 5) 河合榮治郎、社会思想史研究、5頁。Hirst, ibid., p. 166 にいわく——アダム・スミスはあるひとつの問題にこころをもちいるにしても、文学や学問のよりひろい領域をゆるがせにしないでかいてゐる。貯えは豊富で管理人は氣前がよい。経済学は抽象的學說の孤立的な研究ではなくて、はじめからおわりまで、人類についての研究の一部門として、かれらの風俗習慣の批判、国民の歴史、行政、法の批判としてとりあつかわれている。

- 6) Bonar, Philosophy and Political Economy, p. 150 にいう——哲學の第一の動機は効用ではなくて好奇心であり、學問は何かに役に立つことを予想するのでなく、それ自体最も根本的なよろこび、あるいは善なるものとして追求される、とアダム・スミスはいっている (Essays, p. 36) が、アダム・スミス自身、このいみにおいて、かれの最後の日まで哲學者であつた。かれが経済學を研究した第一の動機は、倫理學を研究した動機と同じように、マルサスの場合の博愛主義 philanthropy でもフィジオクラートの愛国心 patriotism でもなかつた。それは本質的に、それ自身のための真理の発見、混沌 chaos とおもわれていたところに秩序を発見することへの愛好であつた。——なお註4)の1746—48年の項参照。

二、アダム・スミスの宗教的立場

西欧の文化を貫くものにふたつの大きな流れ——ギリシャ精神とキリスト教——があるということは周知のことである。ふたつの思想はまじりあいかさなりあつて、さまざまな変奏曲をかなでながら、あるときはギリシャの精神が、あるときはキリスト教の精神が、あらわなすがたを前面に押し出して、西欧の歴史を形成して來た。スミスの生れた時代は、宗教的懷疑と哲學的好奇心の時代であつた。多くのものは、いったい神があるのだろうか、と疑つており、そして哲學はアテネの黄金時代以來かつてなかつたほどのゆたかな收穫をあげていた。Newton, Shaftesbury, Clarke, Mandeville, Hucheson, Butler, Hume そして Adam Smith がこの時代に属してゐる。

スミスの宗教思想がいかなるものであつたかを示すはずの自然神學の原稿が、死の直前焼却された (と Stewart はいう) ために、体系的にかれの宗教を知ることとははや不可能であるが、現存する著作その他に散在する宗教論的なもの

のをひきだし、結びつけることによって、わずかにうかがいしることができる。⁸⁾

まず Hirst によれば、スミスは友人ヒュームや師アリストテレスよりも一層積極的な確固たる信念を有する有神論者 theist であったといわれる⁹⁾。たとえば、「道徳的感情の理論」第六版には次のような一節がある¹⁰⁾——このように不幸な境遇にあるひととびと「息子を殺したという無実の罪で火刑となった Calas のような」にとつて、その人生観 views をこの世に縛りつけるあわれな哲学は、おそらくほとんどなんらの慰めともなりえないであろう。生をも死をも尊ぶべきものと考えさせることのできるすべてのものがかれらから奪われてしまう。かれらは死刑に処せられ、永遠の汚名をきせられる。宗教だけがかれらに有効な慰めをあたえることができる。ひとがかれらの行いをどんなに考えようともたいしたことではない、この世の万象をみる審判者 all-seeing Judge of the world がそれを是認する、¹¹⁾ といつてくれるのは宗教だけである。宗教だけが、あの世——この世よりもはるかに公平で、人間味があり、正義にみちている——の光景をみせてくれる。そこでは時がくれば無罪が宣言され、その美德は最後にはむくいられる。そして勝ちおごつた悪に恐怖をなげつけるその偉大な原理が、はずかしめられあなどられた無実の罪にたゞひとつの有効な慰めをあたえることができる。

しかしながらスミスはキリスト者ではなかった。このことを示すかれの行状として Rae と Hirst のいうところによれば¹²⁾、教授として Westminster 信仰告白書に署名しなければならなかったとき、ヒュームでさえやすやすとやつてのけたであろうような形式的な行爲であつたのであるが、かれは非常に熱意のない行動をとつたといふことであり、また Hutcheson が神学を一般のひとにわかりやすくするためにキリスト教証驗論 Christian evidence にかんする日曜講習を開いていたのをやめてしまひ、また講義のはじめに祈禱する慣例があつたのを、免除してくれるように当局へ願ひ出たけれども拒絶されたといふことであり¹³⁾、また大学の礼拝堂で神の儀式が行われているあいだ、かれは自席でしばしば公然と微笑していたといふことである。そして最もこゝろのひろい同時代の長老派 Presbyterian のひとり John Ramsay によれば、かれの開講の祈禱は非常に自然宗教 natural religion の匂いが強いものであり、また神学の講義は、神学上の真理や人間が神及び隣人に負うている義務は特別の啓示によつてではなくて、自然の光によつて發見されるという結

論を若い學生に与えるようなものであったとのである。

スミスがヒュームの死にさいしてかいた書簡体の文章が、無神論思想として非難されたということについては、すでに註4)のなかの1776年の項でかいたけれども、いまその文章をしるしてみよう（この手紙のはじめの約六分の五は、かれが John Home とともに、ヒュームにあうためにロンドンを出てエジンバラへむかう途中、ロンドンへむけて旅行して来ていたヒュームと Morpeth であったときから、ヒュームが息をひきとるまでの病状を、かれがじっさいに看、また医師 Black およびヒューム自身からの手紙によつて知ったかぎりにおいて、Strahan にしらせる文章である。以下はおわりの約六分の一の部分である。）——このようにしてわたしたちの最もすぐれた、そして決して忘れることのできない友が死にました。かれの哲学上の考えについては、うたがひもなく、あるひとはたまたまかれの考えと一致するからというのでそれに賛成し、あるひとはかれの考えに一致しないからというので非難するというように、ひとびとはまちまちな判断をくだすであります。しかしかれの性格と行いについては、意見のくいちがいは殆どありません。まことに、かれの氣質 temper は、もしこう表現することをゆるされますならば、わたしがいままでに知っていますおそらく他のどんなひとよりも、立派に調和がとれていたとおもわれます。かれの財産 fortune が最も傾いていたときでさえ、かれは大いに儉約する必要に迫られたのですけれども、しかるべきときには慈悲ぶかく氣前のいゝ行いをかかしませんでした。儉約といつても、それは貪欲にもとずくのではなくて、独立を愛することにもとずいていたのです。かれの非常にやさしい性質 nature も、精神力の堅固さと決断の堅実さとを決してよわめませんでした。かれのいつもかわらぬ快活さは、繊細かつ上品にせんれんされた、きもちのいゝ性質とたつぷりのユーモアからにじみでた独特のもので、他のひとびとのあいだで機智とよばれているものがしばしば不和をひきおこす、その原因たる悪意のようなものは、みじんもありませんでした。それは決して、ひとを傷つける諧謔という意味ではありませんでした。したがって、ひとをおこらせるのではなく、その対象となつたひとびとも殆どかならず、愉快にし、たのしませたものです。しばしばその対象となつた友人たちには、かれの会話をより親しみぶかいものにするのに大いに役立つた、あらゆる偉大に愛すべき性質のひとつももちあわせがありませんでした。社会のなかでは非常にきもちのいゝものでありますが、とか

く不真面目でうすべらな性質をともないがちな、あの陽気な気質は、かれの場合にはたしかに、最も厳しい勤勉、最もひろい学問、最もふかい思想、そしてあらゆる点で最もひろく包容できる能力をともなっていました。総じて、わたしはいつも、かれを、その生前であれ死後であれ、完全に賢くて徳の高いひとの觀念に、おそらく人間性の弱さがゆるす極限まで近づいている、と考えています¹³⁾。

キリスト教的伝統のないわが国の読者にとっては、これらの章句は特に無神論として非難されるにあたいしないようにおもわれる。そしてこのことが、キリスト教そのもののみでなく、それを否定するといわれるアダム・スミスの思想体系をさえ理解するためには、きわめて注意ぶくなければならぬ、と筆者が指摘したいゆえんなのである。この国のひとびとが無神論者として生れ、無神論者たることを自明の理とわきまえていて、西欧のひとびとが無神論者となるためにいかに精神的にきびしく対決しなければならぬか、を殆ど想像もしない思想的習慣のもとでは、おそらく西欧の文化のひとつをも正しくふかく理解できないのではなからうか。スミスがこのような手紙をかいたことが、どのような世論の非難をあげたか、という問題はもとより些細なことながらにすぎない¹⁴⁾。しかしこのような些細なことがらへの細心な注意と関心なくしては、利己心と同感とが矛盾するのではないか、という疑問のうまれでた理由も（歴史学派の立場からうまれでたという事実も見失つてはならないけれども）、この問題が久しきにわたってきびしく追求されたという事実も、そしてとりわけ、経済学がどのような思想的背景のなかからうまれでたかという省察も、正しくふかく理解することはできないであらう。

スミスの懷疑思想は非常に注意ぶかくえんきよくに表現され、柔い言葉でかくされているので、うかつな読者はまだわされることがなく、また信仰深い読者も腹をたてることがない¹⁵⁾。たとえば、「道德的感情の理論」のなかから次のような一節を引用してみよう¹⁶⁾——かれの判断が賞讃にあたひすることと非難にあたひすることの感覚 sense でかくじつにみちびかれているときには、かれは神の子 *divine extraction* としてふさわしくおこなっているようにみえる。しかしかれが無知でよわい人間の判断によっておどろかされ狼狽させられて苦しむときには、かれは死すべき運命にむすびつけられていることを発見し、神よりはむしろ人間にふさわしくおこなっているようにみえる。

——このような場合、あわれなやみ多い人間のたゞひとつの有効な慰めは、さらに高い法廷 *tribunal* すなわち、まどわされることのない眼とあやまることのない判断とをもつた、この世の万象をみる審判者 *all-seeing Judge of the world* に上告することである。無罪は時がくれば宣言され、その徳は最後にはむくいられるこの偉大な法廷のまじがうことのない公正をかたく信じていると、かれ自身のこゝろがよわく失望落胆しているときにも、あるいは、清廉潔白の偉大な保護者としてだけでなく、こゝろの平和 *tranquillity* の偉大な保護者として自然が設けておいてくれた、胸のうちに人間 *the man within the breast* が狼狽しおどろくときにも、かれは支えられるのである。このようにして、この世における幸福は、来るべき生命への謙虚な希望と期待とに依存している。その希望と期待とは人間性にふかく根ざしている。この希望と期待だけが、人間性自身の尊厳という高潔な觀念を支えるたゞひとつのものである。また人間性が不断に死に近ずいているという、ものがなしい予想に明るい希望をあたえ、この世の無秩序のためにときどきさらされる最もひどいどんな災厄のときにも、よろこびをあたえることができるたゞひとつのものである。正義がかくじつにあらゆるひとに実現され、あらゆるひとが道徳的知的性質において真に自己にあたいする地位に位置づけられ、また運命によって抑圧されたために、この世においては自己を発揮する機会にめぐまれず、そして他人に知られなかっただけでなく、自分自身才能と徳性をもっていることをみずから信ずることもできず、また胸のうちに人間でさえもはつきりした宣言 *testimony* をおもいきってあたえることができなかったような、そういうひかえめな才能と徳性の所有者、そういう最も謙虚で無口で世間に知られない善行 *merit* をもつたひとが、この世において最高の名声をほしいままにし、その地位を利用して眼もくらむようなすばらしい行いをなしとげたひとびとと同じ水準、もしくは、ときによるとそれよりも高い水準におかれるような、来るべき世界がある、という教義は、あらゆる点から弱者にとってきわめて尊く慰めとなる教えであり、人間性の崇高さにとつてはきわめてこゝろよい教えなので、不幸にもそれをうたがっている有徳のひと、それを信じようと心から真剣にねがわざるをえないであろう。その最も熱心な主張者のあるものがわれわれに、来るべきあの世で実現されると教えた、ほう賞と刑罰の配分が、われわれすべての道徳的感情をそれほどしばしばそこなわなかったならば、その教義は嘲笑者のもの笑いのたねにさらされることが決してなかったであらう

う。——この最後の仮定法を用いてのべられた一節は、教会的信仰をよそおいつゝ、なお本音ををはかざるをえなかったスミス自身の冷やかな嘲笑をいみしないであらうか。段落をあげて、さらにかれは次のごとくに続ける。17)——日夜追従に没頭する *ambitious* 廷臣の方が忠実勤勉な召使いよりも愛顧をこうむるものであるとか、主の側近に侍してこびへつらうことの方が功績や奉仕よりも昇進のかくじつなちかみちであるとか、Versailles 宮殿や St. James 宮殿へ一度進軍することはドイツやフランドル地方へ二度出陣するのと同じ値打ちがあるとかいうことは、不満を抱いた多くの老高官から誰でもきいているぐちである。しかし地上の君主にはいろいろ弱点があるものだと言容な態度でゆるしてやつても、なおこれらのことは最もひどく非難してさしつかえないことがらであるが、この同じことが宗教では、正義の行いとして神の完全性に帰せられている¹⁸⁾、すなわち、信仰帰依 *devotion* の義務、公的または私的な神の礼拝は、徳あり才能あるひとびとでさえ、来るべき生活においてほう賞をうけたり、刑罰をまぬがれたりする資格をうることできる唯一の徳だ、と説いているのである。——こゝでかれは礼拝と奉仕を要求する神を、地上の君主以上の悪しき、えこひいきの主とかんがえ、その前にぬかずくことを拒否するのである。神を礼拝し献身するものは来世においてほう賞され、しからざるものは罰せられるという信仰をえんきよくに否定するスミスは、さらに論述をすゝめて、雄弁家で学識ゆたかであつた Massillon なる人物がカティナ聯隊の軍旗に祝福を捧げるにさいしてのべた演説の一節を引用する。その要旨はこうである。十年間軍務に服した諸君は、最も厳格な修道院の苛酷さ峻厳さ以上にきびしく苦しい生活をたえしのんで、諸君の肉体は禁欲生活を送つたより以上に衰弱してしまつた。しかし諸君は神に捧げるためにこれらの苦業をおこなつたのではないから、きたるべき世には何にもむくいられることがなく、すべてがむなししい苦難にすぎなかつたのである、と。スミスはさらに続けていう。20)——このようにして、修道院のくだらぬ禁欲生活を戦争の尊い困難や冒険と比較すること、前者のために捧げられた一日あるいは一時間が、この世の偉大なる審判者の眼には、後者のためについやされた名誉ある全生涯にくらべてより大きな善行として映る、ということとは、たしかにわれわれのあらゆる道徳感情、すなわち、われわれが輕蔑したり賞讃したりするにあたって依拠するように、と自然が教えてくれたあらゆる原理に矛盾する。しかしながら、この精神こそが、修道僧や教団僧、あるいは修道僧や教団僧の行いや言語に似た行いをし

たり言ったりするひとびとのために、天国を準備して、他方、すべての英雄、すべての政治家や立法家、すべての詩人や哲学者、人間生活の維持、便宜あるいは裝飾に役立つ技術のうえて發明したり、改良したり、卓越したりしたすべてのひとびと、人類の偉大なる保護者であり、教師であり、恩人であるすべてのひとびと、すなわちわれわれが、賞讃にあたいすることにかんする自然な感覚にうながされて、最高の善行と最大的美徳とをみとめずにはいられないようなすべてのひとびとにたいしては、地獄におちるようには判決をくだすのである。この最も尊敬すべき教義をこのように奇妙に應用するならば、それはときによると、この教義を、少くとも敬虔で瞑想的な美徳にたいしてなんらかの趣味とか嗜好をもちあわせていないひとびとの前に、輕蔑と嘲笑の対象としてさらしものにするのだということを、われわれは疑うことができるであろうか。——かれはこの最後のパラグラフで、かれの内心の信条をごまかして信仰あるものごとくに結んでいるということができないであろうか。文字通りに受取れば、かれは、いわゆる低級なひとびとのみが、來世のほう賞刑罰を信じて神に礼拝する宗教を、輕蔑し嘲笑するといひ、有徳で高級なひとびとはその宗教を信仰するのだ、といっているように考えられるけれども、しかし長い文章を全体として考えるとき、かれはやはり現世を無価値とする禁欲宗教を否認しているのであると結論してまちがいないであろう。以上に引用した箇所からでも、われわれは、スミスが來世の賞罰のために信仰することを否定して、もつと現世的な自然な人間性を肯定し、そこから人間道徳を打立てようとしている意圖の片りんをうかがうことができる。かれの宗教的立場はキリスト教を否定する立場、ヒューマニスティックな立場であるとおもわれる。しかしスミスの宗教がどのようなものであるかについては、さらにくわしくそして細心に、かれのとくところをきかねばならない。

- 7) Hirst, *ibid.*, p. 36. なおふたつの思想の交錯と斗争の歴史は、思想史のもつとも重要にして興味あるテーマのひとつである。

- 8) 大道安次郎、生成と発展、57—60頁

- 9) Hirst, *ibid.*, pp. 37—38.

- 10) Smith, *M. S.*, 6th ed. vol. I. Part III, Chap. II. pp. 303—4. なお大道教授、前掲書、61頁によれば、この章句は第

六版ではじめて挿入されたものであるが、筆者はそれ以前の版を参照する機会をもたない。

11) Rae, *ibid.*, p. 60 ; Hirst, *ibid.*, p. 38.

12) しかし Rae は、この事実の記録は大学に残っていない、したがってこのはなしは注目する価値のないゴシップにすぎない、とづつづる。Rae, *ibid.*, p. 60.

13) Fay, *ibid.*, pp. 31-32.

14) The Life of Samuel Johnson, 1791.の著者 Boswell が Johnson にあてた手紙のなかに——あなたは、デイヴィッド・ヒュームじしんがかき、アダム・スミス博士からの手紙をそえた、かれの自伝を、およみになったことと、わたくしは信じます。現代はおそるべきずうずうしさの時代ですね。グラスゴウ大学の自然哲学教授である、わたくしの友人アダム・アンドン博士が、最近たずねてきましたが、こんにち横行しているこれらの有害な作品にたいする、われわれのいかりとけいべつについて、はなしあったのちに、かれは、いまこそジョンソン博士がのりだす絶好の機会だ、といいました。わたくしも、あなたがヒュームとスミスの頭をいっしょになくつつけて、みえをはった不信仰をひどいものにしたらいふという点で、かれに同意しました。この道徳の園にはえた、そのように有害な雑草をふんさいすることは、あなたにとって、やりがいのあることではないでしょうか——という言葉が、同書 Oxford Standard Authors edition, New ed., 1963, p. 810.にあることであるが、みる機会をえず、水田洋、入門、159—60頁から引用した。ところでスミスを弁護する論もあったのであって、Rae, *ibid.*, pp. 311—4によれば、ヒュームをよくしっていた教会人は、かれを、スミスと同じようにはめていたとのことであり、Blair は、スミスがかいたことはみなたどしかった、といったとのことであり、真面目な宗教家でありキリスト教の弁証者であった Lord Hailes は、この手紙をラテン語の詩にはんやくすることをゆるしたとのことである。そして Rae は——スミスのいろいろな文章は、かれが有神論者であったことを示し、また、かれがヒュームを、有神論者と信じていたと考えるべき理由もある。ヒュームは、哲学的には、ものについて、かれじしんの存在について、神について、懐疑論者であったけれども、しばしば想像されているように、これらのことについて世間のひととちがった考えをもっていたのではなかった。Carr-Saunders 博士は、いつもかれを信仰者と考えていた。Miss Mure of Caldwell は、かれを、わたくしがいままでしているひとのうちで最も迷信ぶかいひととした、といった。ヒュームは Holbach に「無神論者はひとりもない」といったということであり、また、

かつて Adam Ferguson とともにうつくしく晴れた夜を散歩しながら、とつぜんたちどまり、星のまばたく空を指さして、「ねえ、フダム、あの天空の不思議をおもつて、神がある、と信しないものがありうるだろうか」といった（このはなしは、Burton 編 *Life and Correspondence of David Hume*, II, p. 451 にある）。——とかいている。しかし、なお、ヒュームやミスが世間から非難されたという事実、および、かれらの宗教が、その時代のキリスト教からなんらかのいみではなれていたという事実は、いぜんとしてこのる。

15) Hirst, *ibid.*, p. 39.

16) Smith, *ibid.*, vol. I. Part III. Chap. II. pp. 324—7.

Smith, *ibid.*, vol. I. Part III. Chap. II. p. 327.

17) 筆者はこの部分をはっきりさせるために、思いきって補足し意識してみた。ところが米林富男教授の立派な訳業、道徳精操論、上、278頁によれば、この部分は次のように訳されている。——しかしながら地上における君主の弱さまでが最大の恥辱と看做される所以は、裁判官の行爲としては、神が完全無欠であるせいである。——このようによめば、筆者のよみかたと全く反対のいみになってしまう。しかもこの部分はミスの微妙な懷疑的宗教思想を理解するうえに、きわめて大切な章句であるから、あえて原文を付して読者の御批判を仰ぎたい。米林教授の訳文にはひじようにおおくをおしえられている筆者は、この場合にもおそらく筆者にあやまりがあるのであらうとおそれている。原文は次のとおりである。—— But what is considered as the greatest reproach even to the weakness of earthly sovereigns, has been ascribed, as an act of justice, to divine perfection ;
18) 19)

Smith, *ibid.*, vol. I. Part III. Chap. II. pp. 328—9.

Smith, *ibid.*, vol. I. Part III. Chap. II. pp. 329—30.

(未完)